

令和5年度 特色ある教育実践研究校（平和教育）報告書 天満小学校

1 学校の課題

(1) 自他を大切にする児童の育成について

令和4年度においては、高学年児童をリーダーとした縦割りグループでの活動や児童会行事、授業や各学級での特別活動等、様々な取組を行ってきた。しかしながら、児童意識調査の結果から、「自分にはよいところがある」という、自己肯定感、自己存在感にかかわる項目で、肯定的な自己評価をしている児童は、全体の77%に留まっていることが分かった。

(2) 身の回りの平和を大切にする児童の育成について

令和4年度においては、地域の遺跡、人的資源等について確認を行い、天満小学校区の被爆の被害や復興の歴史について整理した。今年度は、これらをしっかり吟味し、今後も継続していけるカリキュラムを作成していく必要がある。

(3) 学習したことを表現できる児童の育成について

令和4年度に実施した児童意識実態調査の結果から、9割以上の児童が学んだことや考えたことについて発信する必要性を感じていることが分かった。しかし、各学年における発信の取組が少なく、誰にどのように伝えたらいいのか曖昧となっている。今年度は、異学年や地域、保護者等に対し、平和学習で学んだ内容をどのように発信していくかを検討する必要がある。

2 研究主題

平和な社会の実現に向けた主体者の育成

～学区内に残存する被爆資料（遺跡・証言）を通して戦争の被害を知り、自他を大切にし、身の回りの平和を大切にしていこうとする子どもの育成～

3 取組内容

(1) 自他を大切にする児童の育成について

① 平和教育にかかわる研修

4月に、教員全体で平和教育プログラムの研修を行うことからスタートした。平和学習全体計画を見直し、学校教育目標や広島市の平和教育の目標、「ひろしま平和ノート」を活用した平和学習、各教科等の学習、行事等が、どのように関連しているか把握するようにした。また、目指す児童の姿について共有を図った。



▲平和教育にかかわる研修

8月に、生徒指導主事や教育相談支援主任、特別支援コーディネーターと連携し、自己有用感、支持的風土の醸成についての研修を行った。

② 児童会行事の充実

それぞれの取組の関連を意識せず実施していたため、目的の共有と、目標を設定することが必要だと感じた。そのため、4月に、児童会の代表委員会で、平和教育プログラムに関連した児童会スローガンを立て、承認を受けることから始めた。そして、決定したスローガンを基に各学級で学級目標を立てた。これらの学級目標は、10月の運動会の時期に達成状況を見直し、必要に応じて学級目標を立て直した。

また、これらのスローガンを受け、おりづる集会(たてわりグループで折り鶴を折る会)、平和集会、プラタナス子供集会(たてわりグループでのウォークラリー)などの児童会行事を実施した。行事を通して、児童が感じていること発表し、共有したり、異学年との交流で実践したりする場を定期的に設けた。

このように、目標の設定、行事の企画、実施等は全て、児童運営委員会が企画し、代表委員会で採決・承認し、5、6年生によるリーダー会などを通して全児童で行うなど、児童による自主的、自律的な運営が意識できるように工夫した。



▲「おりづる集会」の様子

2) 身の回りの平和を大切にする児童の育成について

① 平和教育のカリキュラム・マネジメント(平和学習計画の見直し)

4月の研修後、各学年が前年度の平和学習計画を見直し、再整理した。計画を立てた後も、実際に実施した活動や変更を加えた内容などをその都度加筆・修正し、変更した計画を一覧にして教員に周知することを繰り返し行った(添付資料1)。また、平和学習全体計画についても、11月の公開研究会に向けて再度学校全体で整理・検討し、より理解しやすいものを教職員に示した(添付資料2)。

② 地域人材の活用

各学年において、児童と平和に関する活動をされている方々が関わるができる活動を設定した。その際、地域の方の思いや願いと自分の考えとの共通点や相違点を感じることができるよう対話をしたり質問したりする時間を設けた。人材発掘にあたっては、地域コーディネーターや教育委員会と連携して行った。



▲ゲストティーチャーを招いた活動

ゲストティーチャーと事前に協議し、活動の目的や目指す子どもの姿を共有したり、作業をする、音楽を聴く、体を動かす、歌うなど、多様な活動となるよう検討したりした。

3) 学習したことを表現できる児童の育成について

① 「伝える(発信する)こと」の必要性を感じる場の設定

ゲストティーチャーと事前に協議し、「伝える(発信する)こと」をテーマに、講話の内容について検討した。平和学習のスタートとなる、5月の「岩田さんのお話を聞く会」では、伝えることの大切さについて話していただき、児童が感じたことを表現し、他者に伝え、残していくことの必要性や使命感を感じることができるように工夫した。



▲岩田さんのお話を聞く会

② 「発信」を意識したの取組の充実

平和教育プログラムに示されている目標を基に、伝えたり、発信したりすることを意識した取組を実施した。

第3学年においては、社会科の学習から、天満の町の中にも被爆樹木以外に平和や戦争に関係のあるものがあるのか、調べるといふ学習を設定した。およそ20年前に作られた天満小学校の広報誌を読み、天満の町にもたくさんの被爆者がいたこと、戦争に関係する建物や碑がたくさん残っていることを現存する建物や碑を実際に見学し、住職さんや宮司さん等から話を聞き、分かったことや感じたことなどをマップにまとめ、他学年に発表する活動を行った。



▲作成した「平和マップ」

第5学年においては、日本グラフィックデザイン協会と連携し、平和について伝える絵本作りを行った。広島を訪れる観光客や世界中の人たちに、今までの平和学習で学んだ自分たちの知識や、気持ち、平和への願いなどを伝えたいという思いを持ち、およそ3か月かけて、絵本を作成した。



▲作成した絵本

第6学年においては、平和公園の外国人旅行者の方に、広島に原爆が落とされた日時や平和公園に来た目的などを英語で直接インタビューをする活動を行った。外国の方たちが広島の方に興味をもっていたことから、再度平和公園に行き、外国人旅行者の方に広島の素晴らしいところを紹介しながら、広島や平和に対する思いをアピールする活動を実施した。



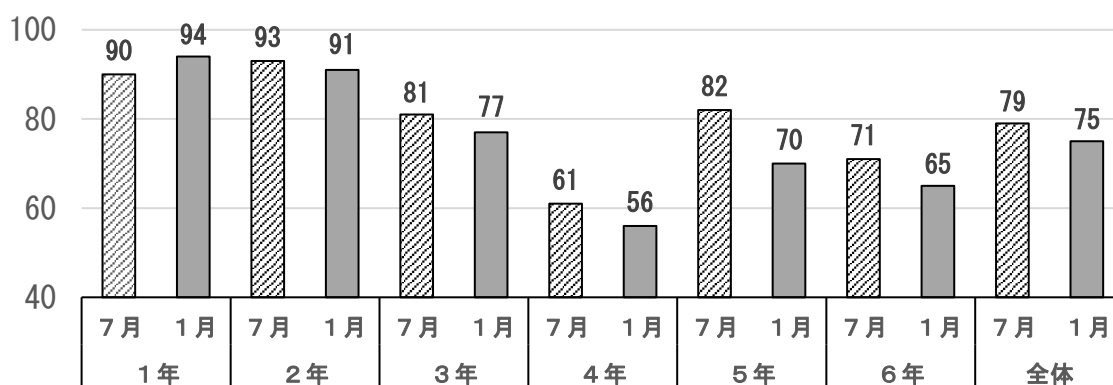
▲インタビューする児童

4 検証結果

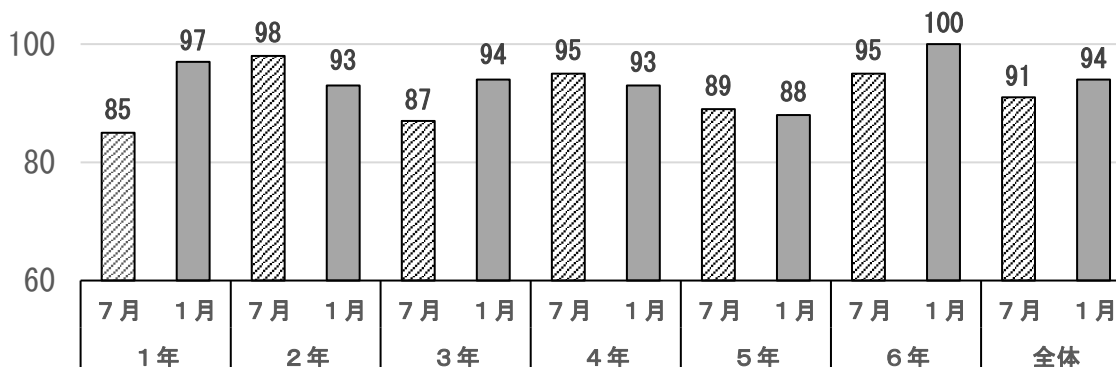
1) 自他を大切にする児童の育成について

○ 児童意識実態調査より

「自分には良いところがある。」という自己肯定感や長所理解に関わる項目について、肯定的な回答をした児童 (%)



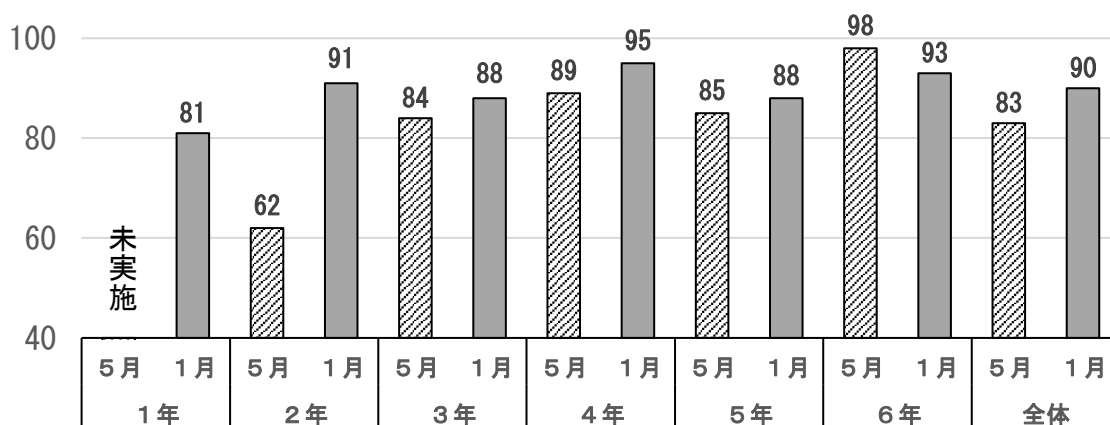
「友達の良いところを知っている。」という、他者理解に関わる項目について、肯定的な回答をした児童 (%)



(2) 身の回りの平和を大切にする児童の育成について

○ 児童意識実態調査より

「身近な平和を守るために、自分ができることについて考えることができた。」という項目について、肯定的な回答をした児童 (%)

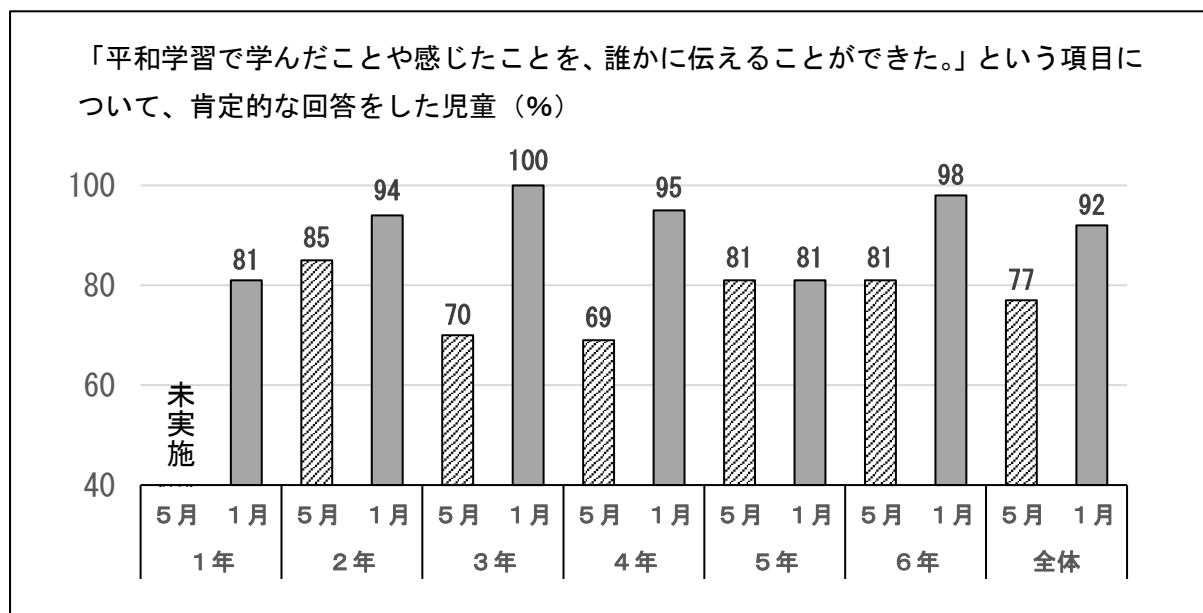


○ 「ひろしま平和ノート」を活用した教員の感想

- 自分の宝物について考え、その後原子爆弾によってそれらが失われた時の気持ちを考える学習は、自分事としてとらえるのにとっても良い学習の流れだと感じた。合わせて校庭にあるプラタナスの木も、天満小学校の宝物と捉えることができた。
(1年生)
- 資料が魅力的なものが増えたように感じた。被爆樹木が世界中に伝わっていることに驚いている児童が多く、保護者にその事実を伝えたいという思いが、手紙を書く原動力になっている児童が多くいるように感じた。
(2年生)
- 昨年度までと比べて、「家族がいなくなる悲しさ」「自分たちが平和を伝えるバトンをもらい、実行する世代であること」を感じやすく、当事者意識をもちやすい冊子の内容だったと思う。
(3年生)
- 「ひろしま平和ノート」を活用した学習において、国語科「ちいちゃんのかげおくり」の学習などを取り上げ、色々な教科等で学習したことと関連させて行えるように意識することができた。
(3年生)
- 3時間目に、「伝える、発信する」という内容がどの学年でも組まれているので、地域の人材や教材の力も借りながら、それを少し広げ深めるような学習内容を、設定しやすかった。
(4学年)
- 「ひろしま平和ノート」に掲載されている資料や指導案だけで授業するのは少し難しいように感じた。児童の実態に応じて、発問を変えたり、順番をアレンジしたり、スライドを作るなど、別途資料を用意するのを感じた。
(5学年)
- 平和大通りが学区内にあるので、「ひろしま平和ノート」の授業後に、そのまま「復興」をテーマに総合的な学習の時間で調べ、深めることができた。
(5年生)
- 地域の人にインタビューするという活動内容は、少し時間的にも難しいと感じている。総合的な学習の時間に平和学習を関連させていればできると思うが、そうでなければ難しい。
(6年生)

(3) 学習したことを表現できる児童の育成について

○ 児童意識実態調査より

**5 研究成果****(1) 自他を大切にする児童の育成について**

研究主題の副題に掲げている「自他を大切にする児童」については、自己肯定感や他者理解に関わるアンケート結果からも、また児童の日ごろの様子からも、十分達成できているとは言えないと感じている。それらは特に、学校の上学年において特に顕著である。学習を通して、自分の身の回りの平和について考え、思いを持ったとしても、それが行動として表出されなければ、本当の意味での世界恒久平和の実現に貢献する意欲や態度をもったとは言えないのではないかと、実践を通して考えるようになった。

来年度においては、今年度の実践を生かして、縦割りグループの活動と関連付けたり、他教科やライフスキル教育等と関連させたりすることを目指したい。また、学習を通して感じたことや願いをきっかけに、自己の行動を振り返り、行動に変えていくことが大切であることを実感させたい。行動をすれば、他者の行動や意見を変えていくことができることや、他者から見た自分の姿も変わっていくことを合わせて実感できるような手立てを行いたい。

(2) 身の回りの平和を大切にする児童の育成について

児童意識実態調査から、戦争の被害や復興の過程などを知り、自分ができることについて考えたり、思い、願いなどを持ったりすることができたと実感している児童の割合が年間を通して 83%から90%に増えたことから、昨年度以上に地域の人材との交流を重視し、調べたり、体験したり、表現したりする活動を実施したことで、児童はより自分事として平和について考えることができたと考えられる。

(3) 学習したことを表現できる児童の育成について

児童意識実態調査から、伝える（発信する）ことができた実感している児童の割合は、77%から92%に上昇した。これは、年度当初に指導者である教員同士で、研修や協議や対話を通して、目標を共有し、それを達成するための手立てや学習計画を立てることができたからであると考えられる。また、教員同士やゲストティーチャーと活動の目的や目指す子どもの姿を共有することで、平和学習がより学校全体の取組として根付いていったと考える。